第4回APWS 熊本水イニシアティブのゆくえは？

第4回アジア太平洋水サミットが熊本で開催

コロナ禍で、前日まで各国元首、首脳級の来日予定が混沌としていたが、結果的には30カ国の参加があり、首脳級会議場には約700名、会場全体で3000名を超える参加があり、大成功であった。日本水フォーラム、熊本市のスタッフの日夜を徹した努力に感謝申し上げたい。以下は会場での感想である。

ユースの活躍が素晴らしい

私が会場で感銘を受けたのは、若い人、小学生から大学生まで（高校生の活躍が目立った）ユースの水に関する意識の高さであった（「ユース水フォーラムくまもと」の高校生のプレゼンでは、自ら経年的に地下水を調査し、専門用語も活用しSDGsまで言及していた）。

多彩な分科会

分科会、私は2日間で6カ所の分科会に参加、①水と災害、②水と貧困、③水と食料、④地下水を含む健全な水循環などに多くの参加者が見られた。すべて英語であったが、国際機関の勤務時代を思い出し楽しい時間だった。

ハイレベルステーツメント

ハイレベルステーツメントでは、各国の国家元首や大統領、副大統領のビデオメッセージが主体だったが、生の声を聴くことができた。サモア、キリバス、トンガ王国、ネパール、アルメニア、ナウル共和国、特にタジキスタンのラフモン大統領の演説は「わが国には8000以上の氷河があったが、既に1000以上の氷河が消失している。世界は、島嶼国（国が海に沈む）だけではなく、山岳国の温暖化被害にも関心を持つべきだ」と、印象に残った発言だった。

サイドイベント

サイドイベントのシンポジウムでは、地元の熊本県、熊本市、くまもと地下水財団、肥後の水と緑の愛護基金が連携し、世界に誇る地下水保全の取組み発表が素晴らしかった。

熊本イニシアティブのゆくえは？

最終日には「熊本水イニシアティブ」が採択された。

その骨子は

1. 気候変動適応策・緩和策両面での取組みの推進　①質の高いインフラの整備推進、②観測データの補完への貢献、③ガバナンス（制度・人材・能力）への貢献、④2国間クレジット制度（JCM）の活用・拡大。
2. 基礎的生活環境の改善等に向けた取組みの推進　①質の高い水供給の整備推進、②質の高い衛生設備の整備推進である。

さらに岸田総理は、これらの実施のために「日本は5年間で5000億円を支援する」と宣言した。

このように国内的には、「第4回アジア太平洋水サミット」は大成功と思われるが、国際機関勤務の経験では、必ず大きなイベントやプロジェクトでは、1年後、3年後、5年後のトラッキング（事後の追求調査、報告など）が義務付けられている。前回ミャンマーで開催「第3回アジア太平洋水サミット」（2017年12月）ではヤンゴン宣言（Yangon Declaration）が採択され世界中にPRされたはずであったが、海外の英文サイトや国際機関のライブラリーで検索したら、ほとんど出てこない。出てきたのは、国連本部の経済社会局（UN・DESA）のSDGsウォーターハブとIISD（International Institute of Sustainable Development）だけである。ミャンマーは、その後軍事政権となり、フォローが難しいが、今回の成果の一つである「熊本宣言」と「熊本水イニシアティブ」が、今後どのようにアジア太平洋諸国や世界に影響を及ぼすのか、来年3月に国連で46年ぶりに開催される世界的な水会議でどのように取り上げられるのか、「勝った、勝った」の大本営発表にならぬように、水関係者や日本水フォーラムだけではなく、日本国を挙げて「グローバルな眼」でウォッチすべきであろう。

（現場人）